一般社団法人
日本茅葺き文化協会
Japan Thatching Cultural Association
JTCA

2011.8 第3号

茅ふきたより

一般社団法人 日本茅葺き文化協会 会報

じもく

01 仮設住宅の屋根に茅を使う 東日本大震災復興支援
02 会からの報告 第二回茅葺きフォーラム開催 鹿児島県南九州市知覧にて
08 ニュース

▼スギ厚板の間に茅を断熱材として入れる（福島県いわき市）

仮設住宅の屋根に茅を使う

東日本大震災復興支援

２０１１年６月７日、仮設住宅が建設されているいわきニュータウンに４トン車に満載された山茅が届いた。送り主は御殿場の富士勇和産業。さらにその輪は広がり、群馬県みなかみ町藤原地区、茨城県のやさと茅葺き屋根保存会からも会津若松の仮設住宅建設現場に山茅が届いた。

震災直後、当協会に富士勇和産業代表の長田さんから、今回被災した茅葺き民家があればその補修の材料として、２千束提供したいと申し入れがあったが、被災した茅葺き民家からの要請はなかった。

一方、被災者のための応急仮設住宅建設が始まり、福島県では、地域産材の利用と職人の雇用促進のために、木造仮設住宅の建設を決定し、公募した。それに対して、当協会代表理事の安藤邦廣（筑波大学教授）がかねてより技術開発をすすめていた、板倉構法による仮設住宅の提案を行い、福島県いわき市と会津若松市に２００戸の建設が決まり、工事が始まった。その中で、グラスウールなどの断熱材が不足し、また、廃棄物を出さず自然素材だけでつくりたいという考えから、茅を断熱材として使うアイディアが生まれ、長田さんより申し入れがあった茅を仮設住宅の屋根の断熱材として使用することが決まった。

茅葺き屋根の補修には使えなくとも、被災者の支援に役立てたいという目的に適い、あわせて茅の新たな需要開拓にもつながるという考えに、長田さんも賛同し、茅による断熱材使用が実現したのである。板倉構法の屋根は、垂木をはさんで1寸厚のスギ板二枚張りとしている構法で、その間の空気層に茅を入れて、断熱性を高めるという設計である。これでグラスウールと同等以上の断熱性能が得られる。また、使用後は、茅としての再利用、あるいは傷んだ部分は肥料として土に還る。現代の茅葺き屋根といっても過言ではない独創的な屋根が出来上がった。

茅の多目的利用や新たな需要開拓の必要性については、当協会のフォーラムでもたびたび議論されてきたところであり、震災というこの危機を乗り越えるにあたり工夫された新しい茅の利用法として注目し、期待したい。

（上野弥智代）

会からの報告

第二回茅葺きフォーラム開催
鹿児島県南九州市知覧にて

第二回となる日本茅葺き文化協会の総会、フォーラム、見学会を、２０１１年６月４日・５日に鹿児島県南九州市で開催しました。約１００名のみなさまにご参加いただきました。

第二回茅葺きフォーラムは「茅葺き地域資源」「茅葺き職人談義」をテーマに開催した。

知覧武家屋敷に残る知覧型二ッ家の茅葺き民家

第二回茅葺きフォーラムに先立ち、代表理事である安藤邦廣から開会の挨拶があった。挨拶では知覧の茅の生業について述べ、知覧の産業と茅葺きについて、次のように話した。

昭和30年代の写真を調べると鹿児島は、茅葺きの宝庫であった。しかし、近代化のなかで急速に姿を消して、知覧にも３棟を残すのみとなった。全国的にも茅葺きの民家というのは時代と共に姿を消しつつあり、現在では少なくなっている。九州は、比較的早くから少なくなった地域の一つである。茅葺きの技術や文化を継承してさらなる発展をはかるということをこの地で行なうことは意義がある。

知覧は日本一、二を争うお茶の生産地である。そのお茶の栽培をするにあたって、茅を肥料として使っている。肥料の茅は南九州市で美味しいお茶をつくるうえで欠かせない。今この地域に、茅葺きは文化財として数少なく残るのみとなったが、なんとか九州に新たな茅葺きが復活するということを、お茶の地域産業をみて可能性を感じる。近い将来に、茅という資源を循環して農業を営み、自分達の暮らしを守るものとして見直されるのではないだろうか。今回の震災をもって我々日本人が末永く子供や孫まで安心して暮らせる社会を築くうえで、考え直す必要がある。その一つに茅葺きは重要な役割を果たすであろう。お茶の栽培にもその一端がみえる。フォーラムを通じて私達は学ばなければならない。と日本の中でも早くから茅葺きが姿を消した知覧でフォーラムを行う意義と現在でもこの地域の基幹産業である茶葉の生産と茅について解説し、茅の資源としての価値、茅葺き屋根の可能性について述べた。

南九州市市長霜出勘平氏より挨拶

「全国から多くの方々に南九州市知覧へお越しいただき本当にありがとうございます。知覧にはお茶をはじめとする農産物、武家屋敷や特攻会館など歴史的遺産があります。そのうちの一つであります知覧方二ッ家は江戸時代の大工集団「知覧大工」の技によりこの地の気候風土に合ったものとなっております。今日お越しになられている方には技術者として、あるいは研究者として日本の茅葺き文化の継承に携わっているとお聞きしました。知覧の歴史や風土を通じて、今後みなさまの活動の一助となりますよう願います。」と歓迎の意を表し、フォーラムの開催を祝った。

■大会プログラム　2011年月６日４日（土）
あいさつ
　代表理事　　安藤邦廣（筑波大学教授）
　南九州市市長　霜出勘平
開催地報告
「知覧の町並みと茅葺き民家」厚村善人（知覧町茅葺技術保存会・鹿児島）
第１セッション「茅葺きは地域資源」
　座長　米山淳一（日本茅葺き文化協会理事・地域遺産プロデューサー）
「地域資源としての二階堂家住宅」　二階堂行宣（高山二階堂家第十五代）
「阿蘇の草資源利用の多様性」
　　中坊真（NPO法人九州バイオマスフォーラム事務局長・熊本）
「地域資源と茅葺きの宿」　田島健夫（忘れの里雅叙苑代表・鹿児島）
第２セッション「茅葺き職人談義」
　座長　上野弥智代（日本茅葺き文化協会理事）
「国宝青井阿蘇神社の葺き替え」中村澄治（球磨葺みこし屋根・熊本）
「阿蘇の茅刈りと茅葺き」小川剛史（肥後茅葺き屋根工事・熊本）
「日田の杉皮葺き」上村淳（奥日田美建・大分）
「知覧茅葺屋根技術保存会の取り組み」
　　永崎一男（知覧茅葺屋根技術保存会・鹿児島）
「次期開催地より」小山志津夫（天栄村産業振興課・福島）
情報交換会

■見学会　2011年６月５日（日）
　知覧武家屋敷～茅葺きの宿雅叙苑～国宝青井阿蘇神社～岩屋熊野座神社～青蓮寺阿弥陀堂～太田家住宅～明導寺阿弥陀堂

●開催地報告

知覧の町並みと茅葺き民家

厚村善人
知覧茅葺技術保存会

知覧は江戸時代に、薩摩藩が領地を「麓（ふもと）」と呼ばれる113の地区に分け、武家屋敷を造り、鹿児島に武士集団を集結させることなく分散して統治に当たっていた。武家屋敷群は、領主の御仮屋を中心とした道路割である。そのため麓の道路は十字路をあまり作らず、T字型や曲線で遠くを見通せないように作られており、防備を兼ねた城塁型の区画となっている。石塔や灯篭を配し、背後を大刈り込みで、更に外側を波上の生垣で修飾しており、生垣には茶・イヌマキ・大刈り込みにはツツジ・サツキを、庭石には凝灰岩を用いること等がほぼ共通している。各戸の石垣、生垣は連続して美しい町並みを形成している。

屋根に使われている茅は全国的には、「千歯」で茅をすごいて、葉っぱを落とした茅の芯だけのもので葺いているが、南九州では茅場で刈り取ってきた茅（ススキ系）は葉っぱ落とさずにそのまま使用することと、畑地に生える真茅（チガヤ）も混ぜて使用している。琉球・奄美の南方系の文化も混ざった地域的特徴もある。

保存会設立時には、知覧町内に5棟の知覧型ニッ家があり、その内3棟を町が所有していたので、伝統的な茅葺き建物の保存継承、茅葺き技術の伝承、記録保存等に努め地域文化の保存継承を図る目的から、二つのグループを一つにまとめ、平成7年「知覧町茅葺技術保存会」を設立した。鹿児島県内においては、茅葺き職人自体が高齢化してほとんど活動できない、集落に職人が居ても数人くらいしかいないなど、職人が減少しており、団体や保存会としてのまとまった技術集団は現在でも我々のみである。

茅葺き技術保存会の活動開始から15年が経過し、現時点では、会員の数も増えており活動は地道に広がりを見せている。人の輪も広がって地域活動の活性化にも繋がっている。

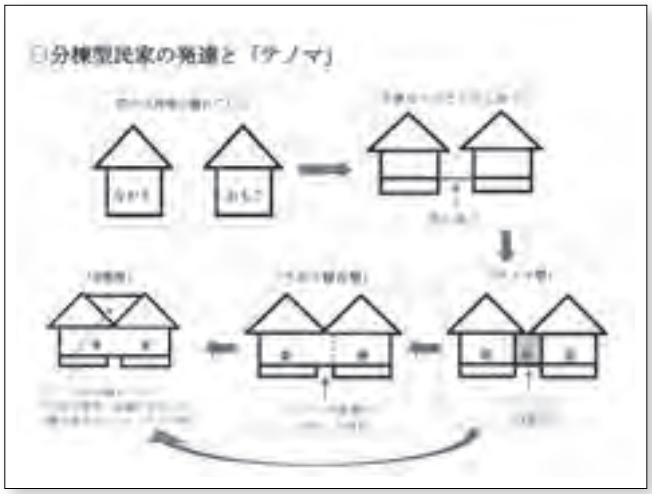
「茅葺き住宅も今、知覧にはわずか4棟しか残されていません。先人から引き継がれてきた茅葺き技術の保存伝承を図ると共に、この茅葺き住宅の歴史と文化を地域の資源として、また、景観の資源や観光資源として少しでも長く保存されることと、上手く活用が図られることを願っております。」

●第一セッション　茅葺きは地域資源

地域資源としての二階堂家住宅

二階堂行宣
高山二階堂家第十五代

薩摩の民家の特徴は一見してわかるように「なかえ」と「おもて」の2つに分かれていることである。なかえは主に生活空間でありカマドがあり囲炉裏がある。それに対しておもては接客など格式のある空間で、客人をもてなす場である。郷士は一般に半農半士をしていて、生活空間であるなかえは農を、接客などもてなす格式の高い場であるおもては武を意味した。



分棟型の弱点はよくいわれるように屋根の窪みに雨が溜まって雨漏りしやすいことである。そのため竹を組んで雨樋から前と後ろに水を排出するという仕組みになっている。この雨樋の下がテノマといわれる板の間である。分棟型の歴史と発達を説明すると、分棟型というのは、なかえとおもてが離れていたが、行き来に不便なため、2棟が近づいていく。そのうち渡り廊下状になり、内部化されていく。テノマ、板の間とよばれる過渡期の状態である。ここが畳の高さと違うことなどからなかえと同化していく。これをもっと発展させたものが知覧の民家である。段階を踏みながら分棟型は変わっていき、ちょうどこの中間に位置する民家の代表例が二階堂家である。知覧型といい、その名のとおり知覧のみにある。

薩摩半島には13戸残っているのに対し、大隅半島にいたっては3戸しか残っていない。二階堂家は今まで無料で公開してきたが、個人の負担では厳しいため、有料化できないかアンケート調査を行なった。その結果、アンケートの約3割が文化財であれば、国など行政が面倒をみるべきだと回答。また、文化財として保存する価値はあるか、という根源的な設問に対しては、意義はあるし懐かしいから

いいんじゃないか、との回答もあったが、中にはなぜ雨ざらしになって傷むものを税金まで使って保存するのかという無理解、無関心な意見もみられた。これについては我々にも責任がある。文化財になると将来にわたって保障される。そうすると国に頼りがちになってしまう。行政の限界というのもあるが、静的な保存、これを私は「ショーケース的保存」と呼んでいて、財政難な自治体、納税者である市民、制約を受ける文化財の所有者、三者にとってメリットは少ない。これを変えることが地域資源化といえる。ヒト、モノ、カネを文化財を中心にうまく回すこと。必要な条件として所有者の意思が前提となる。文化財保存といっても所有者任せのところがあるので、我々所有者側が率先しなければならない。家だからプライベートだなどとは言わずに、ある程度のリスクを負う必要がある。そのうえで担い手をつくることが重要である。例えばガイドのような方を育成するなどをし、そのうえで家や環境まで含め良好な保存がモノとして残ってくる。この環境の保存というのが所有者にとって負担となる。家というのは生活の場である。なので生活感に真の価値がある。そのため訪れた方に、なんらかの体験を提供することが必要なのではないだろうか。

「今日お伝えしたかったのは所有者として、ただ文化財を持っているだけではいけません、文化財の所有者として、それを保存する価値をアピールする社会的責任が我々にはあるのではないでしょうか。それを自覚したうえでやらないと地域資源化は難しいのではないか、というのが私の結論になります」

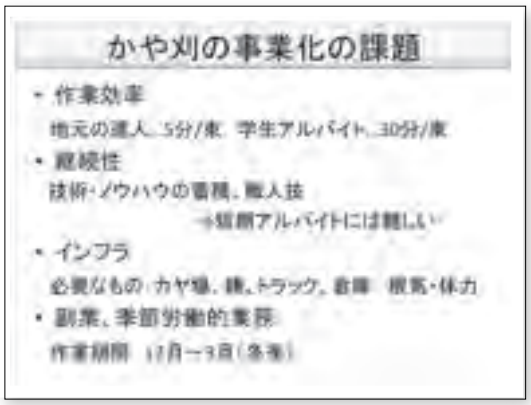
阿蘇の草資源利用の多様性

中坊真
特定非営利活動法人
九州バイオマスフォーラム事務局長

阿蘇は大きなカルデラが広がっており、そこにススキを含む広大な草原がある。我々はこの草資源に注目して活動している。草資源について考えると、木材であれば林野庁、エネルギーや鉱物資源であれば経済産業省、茅葺き屋根になると文化庁となる。実は草資源は管轄している省庁がない。草は資源として考えられてこなかった、というのもあるが、調べてみると非常に有効な資源であることがわかる。国土交通省が河川敷の草刈りに投入しているお金は、毎年５００億円はくだらない、さらに刈った草は処分されていることもわかって、この草を資源として活用できないか以前から考えている。ススキは、C4植物といって成長が早いのが特徴である。樹木と比べると、場合によっては２倍近く成長が早く、それだけススキは光合成の効率が高い。

昔は草地と森林といった自然資源の上に農業と生活、文化があったが、今の日本の産業は、農業、工業、情報、サービス、生活、文化それが石油・石炭・原子力のうえにのっかっている。今現在、石油、石炭、原子力というのは非常に危うく、地球温暖化や原子力の安全問題、日本は大丈夫なのか心配になる。

阿蘇では昔から野草を堆肥に混ぜたり、餌として牛に食べさせてきた。最近では牧草が飼料として主流になりつつあるが、野草の品質と牧草の品質を比べてみると、牧草のほうが問題がおきる傾向があり、野草を見直すべきである。野草は、飼料だけでなく他にも活用している。阿蘇の草から紙をつくり、卒業証書づくりを行なっている。子どもたちが自分で漉いた紙で卒業証書をつくるような環境教育、環境学習も行なっている。草を刈ってエネルギーづくりを試みた。温水プー



ルに電気と熱を供給するガス化発電システムを実験事業として行った。結論からいうと、残念ながら重油より安くならなかった。他にも野草を肥料として利用しており天草などのトマト農家やミカン農家のマルチ用に販売している。

ススキは海外ではディスカンサスと呼ばれていて、畑で栽培されている。肥料や種まきが必要ないので、一度生育すれば、毎年刈るだけである。この特性からオーストリアやドイツではススキを燃やすボイラーなども開発されている。日本ではあまり注目されずに、むしろ海外で日本のすべてのススキの採集など熱心に研究されていて、阿蘇だけでなくに日本全体に調査チームがきている情報もある。

地域資源と茅葺きの宿

田島健夫
忘れの里雅叙苑代表

私は7棟の茅葺きを所有している。高度経経済成長期に捨てられる茅葺き民家をみて、なにか活用できないか、と思ったのがきっかけである。私がつくった茅葺きの宿は、学術的にすばらしいものかはわからないが、観光産業の視点からみてみると、国内外から高い評価を得た。ただし、その評価は茅葺き屋根だからと思いがちであるが、茅葺き屋根だけでは観光にはならない。BRICsを代表に日本は世界のモノをつくる工場から排除されたので、これから先、日本が生きる道の一つに、日本の文化様式を世界に売る、ということがある。それはまぎれも無く観光である。私どもの宿屋には、欧米を中心に外国から訪れる方がたくさんいる。その方々は必ずといっていいほど知覧へ観光へいく。なぜ知覧なのか、文化遺産があるからではないだろうか。そうなると文化遺産である茅葺きをどう活かすかということになってくるが、宿泊産業に茅葺きは難しいと感じる。まず建築費が高いという課題にぶつかる。わずか数年で葺き替えなければならない。私どもの雅叙苑は稼働率も高い、利益率も高いが、それを償却できないほど茅葺きの価格は高くなっている。もしこの茅葺きが価格を抑えることできるのであれば観光として活かすことができ、鹿児島を訪れるゲストの数はもっと増えるはずである。私どもの宿を、お金はいくらかかってもいいから貸し切りたいという方々がいる。しかしながら、旅館産業において茅葺きは弱点もある。害虫の発生や空調の管理などである。私どもは改良を加え確実に空調も低コストで動かせるようにしている。害虫も排除している。屋根の維持費については葺き替えの費用がかかり難しい面もある。

「本日、日本の茅葺き関係者がここにお集りだとお聞きし、私の発表ができてよかったな、と思っております。どこかに私の発表を心のどこかに留めてもらいたいです。西洋の方は日本に憧れている、この日本の美しい風景に憧れている、日本人の細やかな心、律儀な心に惹かれて訪れています。全国から様々な方がお集りいただいていますが、観光の資源と素材は違うということを分かっていただきたい。観光資源といいますけど、資源はマーケットに対応してこそ資源になります、対応は難しいのですが、そこをなんとかしなければなりません。茅葺きが消えることは文化が消えることでもありますので、私も大変苦慮しているところであります。本日いろいろな方の発表を聞きまして、なんとか次の世代に引き継ぐことが私どもの仕事かなと思います。」

●第二セッション　茅葺き職人談義

国宝青井阿蘇神社の葺き替え

中村澄治
球磨葺みこし屋根
棟梁

私が茅葺き職人へ弟子入りした昭和23年当時は、どこの家も茅屋根ばかりで、修理を頼むにも順番待ちになるくらいの仕事があった。文化財や民家の屋根仕事を数多くこなしてきたが、時代とともに仕事が減り、気がついてみれば市内でただ1人の職人となっていた。このままでは球磨独特の技術が失われしまう、という思いから練習棟を作り、またマスコミを通じて情報発信した。そのためか、仕事の依頼が増え国宝青井阿蘇神社などの葺き替えを手がけてきた。

球磨独特のみこし屋根（棟）は、正式にはシナノキと言うそうであるが、我々はみこし屋根と呼んでいて、団体名もみこし屋根である。みこし屋根には、嬉しいことに35歳の若手がはいり、彼は楽しそうに仕事をしている。仕事がなければ後継者は育たないので、関係者の方には大感謝している。

「今までずっと仕事をしてきたなかで感じたことは、屋根の仕事に携わっている方はわかっていると思いますが、茅屋根の持ち主と茅屋根の職人と茅を刈る人と三者一体となって取り組まないと今後のことが心配されるということを感じております。また職人の育成にも力をいれるべきではないかと思います」

その他、球磨葺きについての技術的な説明や質疑応答が行われた。

阿蘇の茅刈りと茅葺き

小川剛史
株式会社肥後茅葺屋根工事　代表取締役

京都から熊本にきてちょうど9年目になり、茅刈りは6年ほど行っている。阿蘇の大観望の標高が約９００ｍのところ、総面積は５００町歩程度でその半分の２５０町歩で茅刈りをしている。毎年茅を刈っており、本格的はじめたのが５年くらい前。毎年２５０町歩で１万束ほど、多い時に１万５千束ほど刈っている。ところがなかなか人材が育たなくて困っている。茅刈りには常に入ってくる人はいるが、定着はせずに辞めてしまう。茅を葺く人は全国的にいるので、今後が頼もしいなと思いますが、茅刈りに目をむけると後継者が育ち難いように思う。

「どげんかしてですね、阿蘇の５００町歩もある茅場を有効に使い、効率や品質をあげて皆様に提供できるようがんばりたい」

国有形登録文化財　京都府美山町
かやぶき民家一組一棟貸し　宿泊施設

屋根晴
CLICK

＊広告も随時募集しています！

日田の杉皮葺き

上村淳
奥日田美建
修行三年目

日田も昔は茅葺きや麦わら葺きの屋根であった。江戸時代から杉の植林がはじまり、明治、大正、昭和と杉の木材産業が盛んに行なわれてきた。杉皮葺きの屋根がつくられるようになったのは大正時代からで、製材の際にでる杉皮を屋根材として使おうとしたのが始まりである。屋根葺きに使う杉皮は、長さ40～43cm程度に揃える必要があり、私たちは雨の日にこの作業を行っているが、自分達で準備した量だけでは足りないので、普段から地元の人々に協力を得ている。

杉皮葺きは、構造的には茅葺き屋根とほぼ同じであるが、杉皮葺きは茅葺き屋根よりも重量があるので、垂木にスギを補強材としてつけている。下地をつけると軒付けにかかる。杉にモトウチガヤという軒付用に加工した茅を用いて厚さ40cmくらいにつける。テグシという仮ヒモをとるクシをあらかじめ刺しておいて、杉皮を並べておく。

この杉皮の屋根の特徴は他の草葺き屋根よりも耐久性があり、補修や葺き替えのスパンが長いことである。ある民家では葺き替えずに80年間補修だけで維持してきた屋根もある。杉皮というのはどの地域でも棟の雨仕舞や谷部の補強、軒の水切りなどに使われている。昔は屋根のルーフィングとして使用されていたということで、納得されるのではないかと思う。

地域的にみると、大分県日田市を中心に、南は熊本県小国町、西は福岡県のうきは市、八女市まで広がっており、現在スギ皮葺きの屋根は神社や仏閣、民家、文化財等合わせると、120棟くらい残っているのではないかと思う。

「私は昔からある良いもの、この地域にあるものというのは必ず残っていくと思います。屋根の維持、材料の確保、職人の育成などまだまだこれから私ですが、一所懸命、毎日勉強して杉皮屋根の技術を習得し、次へ繋げていければ、と思います」

知覧茅葺技術保存会の取り組み

永崎一男
知覧茅葺技術保存会
会長

昔はまだ職人があちこちに居たので、集めて補修や葺き替えなどをやっていたが、どんどん高齢化し、職人が絶えてしまうということで、育成を兼ねて当会を発足した。

知覧の茅葺き屋根は、知覧型二ツ家といって二つの棟を繋いだ形になっているが、そのニツ家の保存補修維持のために我々は活動している。現在では2棟しかないので、数年に一度しか葺き替えの機会がない。したがって次の職人が育つには葺き替えの機会が少なすぎて育成が困難である。茅葺きという技術は茅屋根でなければなかなか覚えられないと思う。知覧だけでなく、県内の他の地域でも職人が高齢化して現役を退き、修復ができないという状態である。そうすると、組織化した私たち茅葺技術保存会へ仕事の依頼がくるようになり、市外にも研修も兼ねて泊まり込みで修復にあたっている。

知覧には工業高校があり、その建築科の学生を対象とした体験学習の場作りも行っている。茅葺きの現場で地元の小学生に茅葺き体験を行ったこともあり、学生や市民へむけて活動もしている。

実は知覧町では、茅場に虫が異常発生し、困った事態になっている。異常発生しているヤンバルヤスデは畑には害はないが、踏みつぶすと、絶えがたい臭いのガスを発生する。それらが畑に蔓延し、民家にも侵入してくる。知覧ではお茶の栽培が盛んなので、お茶畑に茅を敷く、そういうところにまたヤンバルヤスデが発生する。茅葺技術保存会としては茅を調達したいが、害虫がついている茅は流通が禁止されているので茅を集めることが難しくなっている。職人の高齢化問題や若手の育成などもあるが、材料の調達にも苦労している。そのような中でなんとか茅を集めたり、畑に生えている茅をいただいている。我々がもっている茅場は1町歩程度なので、残りは個人個人の茅場を利用しやりくりしている。

次期開催予定地天栄村の紹介

小山志津夫
福島県天栄村産業振興課課長

福島県天栄村には茅葺きの屋根はあるものの、保存のための保存会や職人など、組織だったものがないのが現状である。隣町に茅葺きで有名な大内宿、下郷町があるので、うちの村もなんとか茅葺きの分野をがんばらなければならない。私たちが取り組んでいるのは風力発電や地熱発電、太陽光発電、バイオマス発電など自然エネルギーを使って村おこしをしていて、目指すのは自然と共生する自治体。天栄風力発電所は村営の風力発電所で、建設の際は約10億円かかったが、余剰電力は電力会社に販売し、すでに建設費を償却した。この取り組みに昨年は東北再生可能エネルギー利活用大賞を受賞し、自然と共生する持続可能な村としてやっている。

地域おこしをする秘訣、ヒト、モノ、カネこれがうまく結びつく仕組みづくりが大切である。天栄村ではＥＩＭＹ湯本プロジェクトをやっている。ＥＩＭＹとはエネルギーの地産地消、Energy In My Yard というキーワードである。東北大学の新妻教授の発案で、「回そう風の力で土の力で」風は風力や太陽光、土のエネルギーが地熱、バイオマス、もちろん茅も含まれる。その他に風の人＝よそもの、土の人＝地元民、人のエネルギーも有効に使おうと推進している。炭焼き体験などバイオマスもやっている。この炭焼き体験のなかでみえたのが、この茅である。地域のおじいちゃんたちとやったときに、みんなすごく良い顔をしていた。これは昔の村で結いとしてやっていたことなので、なんとか復活させたいという思いである。湯本地区には茅葺き屋根の温泉が２軒残っており、今も営業している。他にトタンを被った屋根であったり、手入れが行き届かなくなってしまったものもある。これらを再生して活用したいというのが我々の思いであるが、技術も組織もないので、是非、来年にみなさまに来ていただいて、アドバイスやご指導をいただきたい。

漫画家のつげ義春さんが、昭和42年ごろに東北を旅行し、天栄村に訪れた際に書いたペン画が残されている。つげさんは湯本の屋根の雰囲気が一番好きということで、ペン画に描いていただいたが、その旅館もなくなってしまった。これをなんとか、トタン屋根から、地域の人達にも関心をもってもうよう取り組みを行っている。隣町である下郷町大内宿で実際に取り組んでいる方々を招いて勉強会もしている。

「この地区に、気持ち金もち、という良い言葉があります。冬を迎える山村は厳しいので暖をとるために薪をいっぱい蓄えることで余裕をもたせ、心を豊かにしたいというようなことだと思います。来年、茅葺き屋根の家を補修します。そこで皆様とお会いできたらと思います」

ニュース
「葺く―草と木でつくる屋根―」展開催

当会が共催している竹中大工道具館平成 23 年度企画展「葺く―草と木でつくる屋根―」が開催されます。

◆期間 8 月 22 日（月）～ 10 月 1 日（土）
平日 11:00 ～ 17:30
土曜 10:00 ～ 18:00（最終日は 17:00 まで）

◆会場　GALLERY A^4（ｷﾞｬﾗﾘｰｴｰｸﾜｯﾄﾞ）
東京都江東区新砂 1-1-1
竹中工務店東京本店 1F

◆記念講演会
「里山に学ぶ～草と木でつくる屋根～」
日時：9 月 9 日（金）18:00 ～ 19:45
講師：安藤邦廣（筑波大学教授・建築家）

◆体験教室
「茅を葺いてみよう」
日時：9 月 10 日（土）13:30 ～ 16:00
講師：日本茅葺き文化協会
定員：20 名（要申込）

※詳細は公式 HP をご覧下さい。
http://dougukan.jp/fuku/
問い合わせ：竹中大工道具館
　　ＴＥＬ：078 - 242 - 0216

◎みなさんの情報をお寄せ下さい！
茅葺きについてさまざまな情報とご意見・ご要望をお待ちしております。茅刈り、葺き替え情報大歓迎。事務局宛までお寄せ下さい。

茅ふきたより　第３号
2011 年 8 月 20 日発行（非売品）

発行：一般社団法人日本茅葺き文化協会
編集：茅ふきたより編集委員会
一般社団法人日本茅葺き文化協会
〒 300-4212　茨城県つくば市神郡 108
TEL/FAX 029・867・5829
E-mail　info@kayabun.or.jp
URL http://www.kayabun.or.jp